

一乗谷朝倉氏遺跡出土資料について

現在当館に福井市の一乗谷朝倉氏遺跡から出土した石造阿弥陀如来像が保管されている。ここでは当館への保管にいたる経緯を含めこの資料の紹介を行う。

1. 史跡指定と阿弥陀如来像保管にいたる経緯

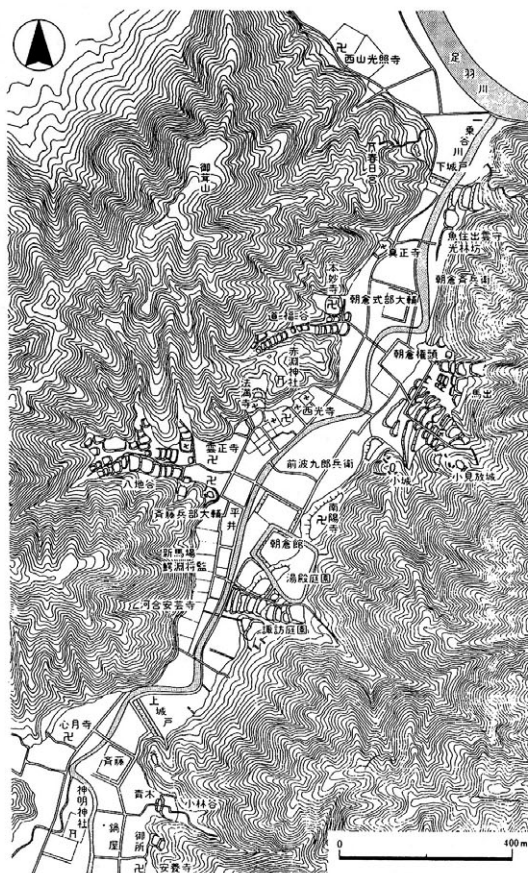
一乗谷朝倉氏遺跡は、わが国有数の戦国城下町であり、現在国の特別史跡の指定を受けている。その遺跡保存のために本学法文学部教授故井上鋭夫氏らの奔走と、福井県教育委員会の迅速な対応があった。

遺跡は昭和5年(1930)、城戸内にある湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の三庭園及び朝倉館跡に、安波賀地内の西山光照寺跡を加え、国の史跡・名勝の指定を受けていた。昭和42年(1967)、史跡全体の史跡公園化を目標とする環境整備事業が計画され、まず三庭園が発掘整備された。続く43年には朝倉館跡の発掘調査が行われ整備に着手された。遺構の残存状況は良好で、館跡の全面発掘のために継続調査を行うことになっていた。

ところが44年に計画された農業構造改善事業(足羽町足羽一乗土地改良区事業組合)で事態は急展開する。45年7月、同事業の一環として、水田の区画整理の工事が上城戸の外側(南東側)の東新町地内で始まった。上城戸の外側は伝承や字名から、足利義昭が滞在したという御所跡・安養寺跡をはじめとし、斎藤竜興の屋敷跡など遺構の存在が推定されていたが、調査はされていなかった。区画整理の工事のためにブルドーザー等の大型機械が導入されたため、表土が削られて、地下に残っていた遺構が破壊され、大量の遺物が出土したのである。

45年8月18日、井上教授はたまたま編集中の『蓮如 一向一揆』(日本思想大系17 岩波書店1972)に収める「朝倉始末記」の校注をつけるための現地調査として一乗谷を訪れた。教授は東新町の工事区域を踏査し出土した大量の遺物を検討して、遺構が残存していることは明らかだと判断した。また朝倉氏の居館をはじめとす

る城下町のあった城戸内にも区画整理が予定されていたことから、同夜、青園謙三郎福井テレビ副社長(当時)を通じて須知邦武福井県副知事(当時)を訪ね、工事の即時中止を申し入れた。翌19日同副知事と現地を視察した結果、20日に工事はいったん中止され、21日から25日までの5日間、井上教授、福井大学教育学部重松明久教授の指導の下に金沢大学考古学クラブ、福井大学教育学部の学生によって緊急調査が行われた。当館保管の石造阿弥陀如来像はその時の調査で発見されたものであり、保存のための緊急避難措置として出土陶器などとともに本学へ移送されたものである。出土地点は特定でき



第1図 一乗谷全体図(『一乗谷と職人』より)

ないが青木・小林谷・御所付近であるという。

これを契機に45年の秋から翌46年の春にかけて改めて発掘調査が行われ、御所跡遺跡から暗渠遺構などが確認され、安養寺遺跡からは墨書札や中国銭などが出土した。この調査をうけて46年2月、地元側の合意を得、農業構造改善事業は中止された。7月、西山光照寺と城山、上城戸の外側の小林谷・御所・安養寺まで含めた278haが国の特別史跡に昇格指定された。さらに47年度には福井市が用地を一括買収し、また47年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所が発足し、組織的な発掘調査と環境整備が始まった。その後56年同研究所は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館と名称をかえているが調査は継続されている。

なお、この経緯については室山 孝氏（石川県立図書館史料編纂室、当時金沢大学考古学クラブ員）と仁科 章氏（福井県立博物館学芸課長）の話を参考にさせていただいた。

2. 朝倉氏と一乗谷について

福井市街から東南に約10キロの場所に一乗谷はある。一乗山麓を源とし足羽川に流れ込む一乗谷川を挟む南北5キロの細長い谷で、ここに戦国大名朝倉氏の城下町遺跡が存在する。

朝倉氏の祖先については但馬国朝来郡・養父郡（現兵庫県）の国人、日下部氏から起こったと言われている。越前入国のきっかけは南北朝の動乱で、北朝方として戦った朝倉広景がその功から黒丸城を与えられた事による。それ以後家景迄は黒丸城に居住した。但し、高景の時の將軍からの下付及び自らの荘園侵略による勢力拡大、教景の永享の乱（1438）・結城合戦（1440）への参加が見られる以外は、朝倉氏は歴史の表舞台には余り出て来ない。脚光を浴びるのは家景の子孝景（敏景・英林）の時になってからである。長禄合戦（1459）以降の幾つかの戦によって統一を進めてきた孝景は、応仁の乱（1467－77）で西軍から東軍に寝返る事で越前を掌握した。黒丸城から一乗谷へと本拠を移したのもこ

の時である。しかし、以後も周囲との争いは続いていた。代が替わっても内紛や一向一揆との問題があり、ある程度の安定期に入ったのは貞景や孝景（宗淳）の頃であった。

更に一乗谷が城下町として発展したのもこの時期である。『朝倉孝景条々』にも見る様な集住政策が取られ、領国文化の育成と同時に京都から下向した人々の知識によって文化面でも飛躍を遂げた。また足利義秋（義昭）は大和の松永久秀から逃れ義景を頼り、一乗谷安養寺に移った（1567頃）。この頃には曲水の宴等の諸行事も開かれ、当時の名残として幾つかの庭園跡も一乗谷には見つかっている。

しかし、義昭は兵を動かさない義景を見限り織田信長を頼って一乗谷を去った。以後義景は信長と対立する事になる。優位に立った事もあったものの次第に追われる立場となり、ついには一乗谷に火をかけて大野に逃れ自刃する事になった。広景の越前入国以来230年、一乗谷においては約100年に及んだ朝倉氏の支配はここに終わったのである。

参考文献

- 『一乗谷朝倉氏遺跡―御所・安養寺』福井県教育委員会 1979
- 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』福井県教育委員会 1979
- 『一乗谷』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1993
- かつおきんや『一乗谷のなぞ』若草書房 1986
- 佐藤 圭「朝倉氏の越前入国について」（『年報中世史研究』15、1990）

3. 石造遺物（阿弥陀如来像）について

長方形の石版の片側に阿弥陀如来の立像を半肉彫したものである。石版は横43.0cm、縦は下半を欠失しており現存長47.5cmを測る。厚さは最大で5.7cmである。

像は光背を意識した舟形の「ほりこみ」のなかに刻まれており、蓮華座の上に立ち、頭光をもつ。像高27.5cm、頭光の直径は13.3cmである。

像は縦、横に割れており、頸部と肩部の一部を欠いている。右手掌を前にして立て、左手掌

を前にして下げる来迎相で上品下生の印を結ぶ。

頭部は肉髻・螺髪で衣服は衲衣のみである。額には白毫が、頭部の正面には、肉髻珠が表現されている。

頭光と足下の蓮弁の輪郭、そして、顔、頭、胸、手のひら、足といった衣服に覆われない部分には赤彩が施され、その上に金泥が点々とみえる。金泥は当初、赤彩の上に全面に塗布されていたものとみられる。

本資料のように石版に像容が刻まれた例は一乗谷では少ない。

材質は、「笏谷石^{しやくだにいし}」と通称される福井市足羽山麓産の火山礫凝灰岩である。

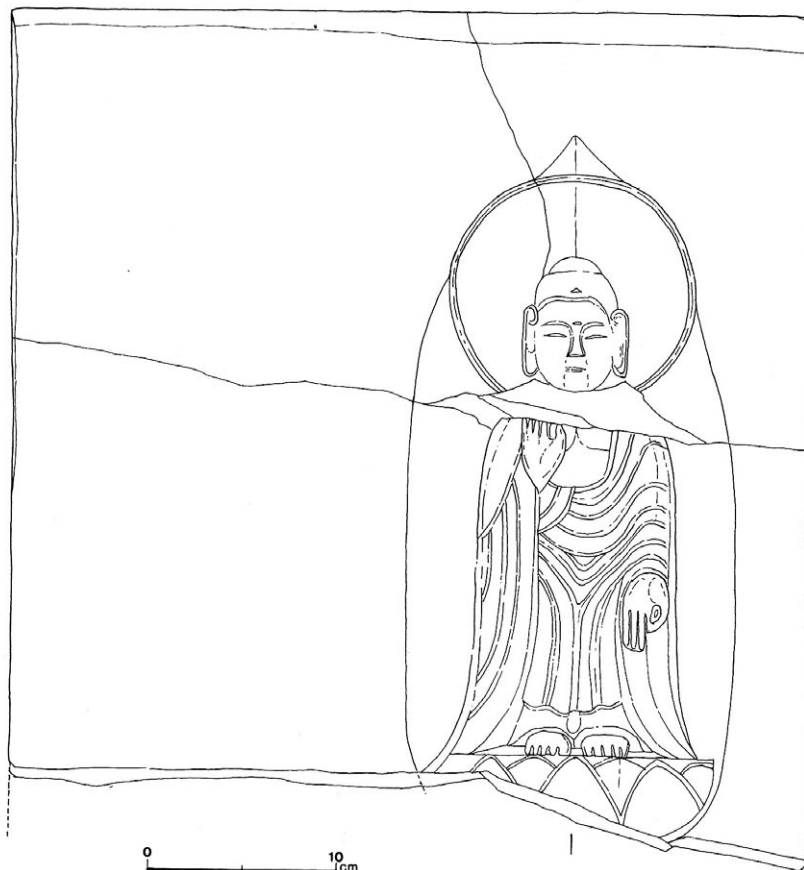
一乗谷の石造遺物は約3000基といわれており、紀年銘資料でみると、文明年間から天正元年までにつくられたものがほとんどである。このうち特に多いのは天文年間（1532～1555）で、本資料もこの時期の所産と見て大過なからう。

参考文献

- 水藤 真編『一乗谷石造遺物調査報告Ⅰ』 福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所 1975

〔 執筆分担は次のとおりである。 〕

- | | |
|------------|-------|
| 1. 金沢大学資料館 | 在田 則子 |
| 2. 同 | 橋爪 直子 |
| 3. 同 客員研究員 | 三浦 純夫 |



第2図 石造遺物（阿弥陀如来像）実測図